



秋田高校同窓会新先蹤録委員会 編
新先蹤録
秋田高校を飛び立った俊英たち
9・1刊 A5変型判360頁 本体2000円
春風社

未来への信頼を感じる事ができる

語り継ぐ記憶として丹念に形にした努力の賜物

末松裕基

本書は、秋田高校創立150周年を記念し刊行されたもので、各方面で幅広く活躍してきた同窓生38名の人生の歩みがまとめられている。「先蹤」とは先人の事跡のこと、同校130周年に『先蹤録』が編まれたことから、書名は『新先蹤録』となっている。登場人物の人生に共通して見られる特徴を挙げると、まずはその粘り強さである。元国連事務次長の明石康氏は、報いられることは少ないが困難に徹底的にぶつかり努力して前へ進むことの重要性を説く。その他、訪問看護師の黎明期を切り拓いた秋山正子氏、その探究心で白神こたま酵母を発見した小玉健吉氏。就職年に五輪出場も会社で無遅刻・無欠勤を貫いた元早大競走部監督の鈴木重晴氏。「俺は幸せだった」「選手たちはかわいくて、掛け替えのない存在であり、自分の生きがいであった」と語った。大学生でペーリング海峽横断計画を采司法長官に直談判し、後に直木賞作家となった西木正明氏。「悲哀や挫折の連続こそが人生」と語る。重度の吃音を経験し、人の物言いに興味から、能、歌舞伎の作品も書いた劇作家の野口達二氏。「毎日緊張し、そして学

ぼうとする姿勢がないといけ(ない)と謙虚さが光るジャーナリストの橋本五郎氏。続いての特徴が、志の高さである。心理学者の伊東博氏は自ら尽力した方ウンセリングの普及に疑念を抱き、現状に甘んじず前向きに問い直す姿勢を示す。卓球世界王者の木村興治氏は毎日砂を10粒落とすような地道な練習が高い山を築くために必要な裾野の広さに繋がるとして、子どもたちに志を高く持ち「当たり前のように自分に高い要求を課してほしい」と願う。これらは人間の存在に対する思索を人生の中心に据えるとした実業家の小玉得太郎氏に見られるような人間への強い思いが深く関わっていると言える。ただそれは窮屈なものではなく、政治学者の佐々木毅氏が、大思想家との対話の楽しみはどこかのオッサンと雑談をしている感じと言っているほどよく肩の力が抜けている。そしてこれらに通底する次の特徴は反骨心である。当時、昭和期史料が少なく「よし、なければ自分で探そう」とした歴史学者の伊藤隆氏や、日本のリーダー技術の遅れを「通信技術を学んで見返したい」と後にデジタルリーダーの磁気記録術を作り上げた工学者の岩崎俊一氏。地方出身者の交流の場「若い根っこ会」をつくった社会運動家

の加藤日出男氏。廃業寸前でも理想高く高品質の酒造りを実現した蔵元の齋藤昭一郎氏。「ちょっと待て」と社会に水を差した『面白半分』発行人の佐藤嘉尚氏。教師を殴り退学処分後、フランスでシスタンス運動にも加わったこの点に関わって、美術史家の山梨絵美子氏は「美術作

品ともある生活の原点は秋田での暮らしにある」と述べる。母との散歩中に犬は阿吽を意味することを教わり「形は何か深い意味や古い歴史を持つていることを印象づけるなど、文化的なものにも触れた」とする。政治学者の佐々木毅氏は「秋田で若い時代を過ごしたということを大切にしようという共通の感覚」の重要性と「それをより良いものに育てていく」ことの意義を訴える。また、元東北大学総長の吉本高志氏は「秋田の海が大好きです。人生は順風満帆ではありません。四季、真夏の海に沈む大きな太陽、白い波頭が幾重にも押し寄せる真冬の海、その時々心に癒され再び現実に戻ってゆくことを大切にしてください」と語る。教育は文化的な営みだが、文化(culture)は「耕す・栽培する(cultivate)」から生まれた言葉である。つまり丹念に耕す育てい実を結ばせるという意味である。先の鈴木校長と同期生の元秋田県知事の小畑二郎氏は「どんなに善い政治をもつていたとしても、教育に根底を置かな政治や行政は、根なし草らのようなもので、パッと咲いてもすぐ枯れてしまう」と生涯教育を県政の柱に据えた。

秋田高校という「養母は、在校生時代に教わった教員だけではなく、同窓の仲間、秋田という大地と故郷の海が人を支える。人はその支えによって、安心と励ましを感じ、目標や拠る所を糧に新たな挑戦が可能となり実を結ぶのではないだろうか。本書のような誠実な取り組みによって「養母」はさらにその存在感と包容力を増す。本書は5年をかけて編まれ、コロナ禍で聞き取りが難航し、調査・自筆記述の重視へと転換せざるを得なかった。「トンネルの暗闇」とその苦勞が語られている。本書は編集委員と関係者の方々が語り継ぐ記憶として丹念に形にした努力の賜物であり、決して諦めない直向きな過程は本書の登場人物が示す生き方をまさに体現している。人と人との間(inter)にしか人への関心(interest)は生まれない。若い人への物質的なバトンと心と心をつなぐもので教育そのものである。ミロコマチコ氏の絵を用いた装丁も生命感溢れる迫力と意味合いがぴったりで、カバーをめくると同窓の層の厚さを想起させる山の姿もある。秋田を訪問したくなった。素直に全力で生き、貪欲に学ぶ。忍耐強く、謙虚に真面目に続ける。自らに厳しく、他者に真剣に向き合う。温かい記憶の揺籃で人間は育つ。愚直に生きたい。そう感じた。「自分もここに名を連ねるに値する人間か」と在校生や教職員への応援はもちろん、38名のご家族・知人も喜ばれていると思う。人間一人ひとりのかけがえのない、見ようと思わないと目に見えない奥深さ。38名の人生を体験しながら対話している感覚になり、自分もそのようであることができるかもしれないという勇気をもらえた。若い人に限らず私たちが自らの人生をどう生きるか、未来への信頼を感じることができている。 (東京学芸大学)

仏文化研究者の椎名其仁氏。出世に取り憑かれた人々について「彼らは生きること忘れてしまったのである」と語った。弱小チームを日本一にしたバスケット指導者の中村和雄氏。軍国教育の風潮に阿らず人の真正のありようを求めた高校教員の町田與太郎氏。社会の慣例や常識を問い直すには並大抵の努力が欠かせないが、これほどまでに多様で先進的な人々を輩出する学校とは何なのだろうか。これは高校とは何か。」という問いと関わっている。

「不自由な時代であっても幸せであったのは、いい先生方に恵まれた」(明石氏)、高校は「この道にすすむきつかけをもらい、また物事にしつこく取り組む基礎を学んだ時期」(天文学者の林左絵子氏)と生徒に感銘を与え、時に「強烈なショック」「圧倒(現同窓会長・元文部科学事務次官・銭谷真美氏)をも感じさせる場であった。鈴木健次郎元校長が1963年に発した「汝、何のためにそこにありや」は自主自立を求める同校校風の象徴として語り継がれ生徒を鼓舞する。

以上は「高校」への注目だが、「秋田」に焦点化して「秋田高校とは何か?」をさらに考えてみたい。母校は英語でalma mater

秋田高校という「養母は、在校生時代に教わった教員だけではなく、同窓の仲間、秋田という大地と故郷の海が人を支える。人はその支えによって、安心と励ましを感じ、目標や拠る所を糧に新たな挑戦が可能となり実を結ぶのではないだろうか。本書のような誠実な取り組みによって「養母」はさらにその存在感と包容力を増す。本書は5年をかけて編まれ、コロナ禍で聞き取りが難航し、調査・自筆記述の重視へと転換せざるを得なかった。「トンネルの暗闇」とその苦勞が語られている。本書は編集委員と関係者の方々が語り継ぐ記憶として丹念に形にした努力の賜物であり、決して諦めない直向きな過程は本書の登場人物が示す生き方をまさに体現している。人と人との間(inter)にしか人への関心(interest)は生まれない。若い人への物質的なバトンと心と心をつなぐもので教育そのものである。ミロコマチコ氏の絵を用いた装丁も生命感溢れる迫力と意味合いがぴったりで、カバーをめくると同窓の層の厚さを想起させる山の姿もある。秋田を訪問したくなった。素直に全力で生き、貪欲に学ぶ。忍耐強く、謙虚に真面目に続ける。自らに厳しく、他者に真剣に向き合う。温かい記憶の揺籃で人間は育つ。愚直に生きたい。そう感じた。「自分もここに名を連ねるに値する人間か」と在校生や教職員への応援はもちろん、38名のご家族・知人も喜ばれていると思う。人間一人ひとりのかけがえのない、見ようと思わないと目に見えない奥深さ。38名の人生を体験しながら対話している感覚になり、自分もそのようであることができるかもしれないという勇気をもらえた。若い人に限らず私たちが自らの人生をどう生きるか、未来への信頼を感じることができている。 (東京学芸大学)